

婦人と子ども

秋が来た

秋が来た。晴れた日、澄んだ空氣、木の實草の實の豐熟、及び吾等と子供等との健康をもつてよき秋が来た。

ある朝の急に引しまつた爽かさに、夏の子の弛れたころが蘇る。どんよりとうたゝ寝でもして居た様な健康が、むく／＼と目醒めて来る。全身の筋肉が、すこやかなる緊張を増し加へて、行くに廣き野、攀づるに高き山を、もとめて来る。踏みしめる足の一步々々に生の力が籠り、うち振るうち振る腕に生の活々しさが溢れる。畢竟、秋は戸外の季である。更に、おのが健康を自ら戸外に味ひ樂ましむべき季節である。

大正六年十月一日
第十七卷第十號

近頃の都會生活の最大の不幸は四季の自然を知らぬことである。而して四季の自然の中、最も都會に缺くるものは秋の自然である。春は元來が人間に和する處がある。春風都門を訪れ、都人花雲に迷ふて、春の人、人間の春に酔ふことが出来る。夏は人皆青山白砂の間に避くるを常とするけれども、夏そのもの、面白味に於ては、人間の夏にこそなかく／＼に眞の味ひがある。冬の享樂はいふ迄もなく人間のもの、たゞ秋に至つては、自然の秋と人間の秋と、そこに甚しい差別がある。

人間の秋は暗く、自然の秋は明るい。人間の秋は衰へ、自然の秋は熟す。人間の秋は悲しみ、自

然の秋は歡ぶ。昔から秋を悲しきものに言ひなしたのは、人間の秋を知つて自然の秋を知らぬ多感なる都會詩人の哀歌に初まる。眞の自然の秋を知るものにとつては、晴明の朝、斜照山を焚く夕、黄金萬頃の稻田、紅熟繁々の果樹園、秋は歡喜の歌、祝ひの宴、感謝の祭に忙しくて、何處に一味哀愁の潜むべき隙もないのである。出でよ。野に出でよ。而してそこに輝き渡る快活豐滿なる自然の秋の姿を見よ。

殊に自然の秋は、子供等の爲に絶好の樂園である。自然の秋は彼等の爲に、實に人類そのもの、兒童期生活を、さながらに展開し來つて、其の樸素快濶なる原始的快樂を擅にせしむるのである。椎の實拾ひ栗拾ひに天産拾食時代の蟲追ひ、小鳥捕りに狩獵生活時代の、いづれも其のまゝの情趣が味はれるとも言はれる。兎に角くにも泥まびれの尻切れ草履に野を踏みしだいて、千里我がもの

顔に馳け遊ぶ輕快活潑なる姿に、或は草に臥て滿身の日を浴びながら柿の實の甘きに舌を鼓つ無心の顔の色に、自然の子供の眞に單純にして眞に幸福なる生活を見られ得る。

秋が來た。秋が來た。山に野に、眞の自然の秋が來た。吾人は人間の秋の哀歌に順れた吾人自身の爲に、後園に日和に椎の實を拾ひ、前庭の夕日に銀杏樹の葉を拾ひ、野に蟲を追ひ、林に小鳥を狩る樂しさ。更に自ら拾ひし山の栗と自ら掘りし畑の芋の甘さを知らぬ子供達の爲に、此の自然の秋を知らしめなければならぬ。戸外の秋。子供の秋。而して健康の秋。吾人は不用意に此の好き秋を空過してはならない。